
約束の街

スエルテ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

約束の街

【Nコード】

N5068M

【作者名】

スエルテ

【あらすじ】

行商人の荷馬車にいつの間にか潜り込んでいた少女は、馬車の持ち主の青年に、ある街へ向かうようにと指図する。彼女はそこで恋人と再会の約束をしていると言うが、別れる前に、何と彼に大金を渡していたとのこと——。短編です。

前編

「な……何だこれ!？」

小さな町を出て、細く曲がりくねった道を暫く行つたところで、青年、マシユウは素つ頓狂な声を上げた。

己が操る馬車の荷台、そこに山と積まれた荷。それだけならば、いつもと変わらない光景だった。しかし、そこに見えた異様な物。それは。

「まさか、人の手……!？」

行商の大切な商品である積荷が傷まないようにと掛けられた布から、それは覗いていた。そんな物を積んだ覚えはない。だとしたら、誰かが乗り込んだのか、もしくは。

瞬間的に過ぎつた一番最悪の事態を頭から追い出し、できる限りの速さで布を掴み、一気に引いた。

すると、そこには一人の少女が横たわっていた。たくさん積みられた木箱の間にすっぽりと器用に納まっている。

御者台から身を乗り出して確認する限り、どうやら外傷はなさそうだ。とりあえずはほつと息をつく。そしてどうしたものかと悩んでいると、少女の臉が震えた。続いて小さな声を洩らす。

「……あら？」

目を開け、身を起こし、マシユウを見て。驚くこともなく、緩慢な動作で欠伸を噛み殺す。それからもう一度、目の前で何か言いたげに口を半分開いて固まっている青年を見て。こくん、と首を傾げ

た。

「あなた誰？」

「それはこっちのセリフだろう！」

状況を理解していない少女の一言に、思わず声を荒げる。それに顔をしかめ、少女は唸った。

「もー！ そんな大きな声じゃなくても聞こえるわよ！」

「……あんた、誰なんだ？ なんで俺の馬車に乗ってるんだ？」

「いやよ、教えない」

「はい？」

しれつとした一言に、マシユウは耳を疑う。

「あなたがこの馬車の持ち主？ 一人なの？ ふーん、けっこう若そうよね。私とほぼ同じ年ってどこかしら？」

少女は訊かれて当然の質問に答ええないばかりか、逆にマシユウを質問攻めにし、不躰なまでに上から下まで眺める。長い睫毛が縁取る、澄んだ目を細めて。

「持ち主が気持ち悪い中年男とかだったらすぐに逃げようと思ってたんだけど、あなたなら、まあ……うん、見た目はそこそこね。ちよっと髪が赤過ぎるのが私の好みではないけれど。そう、いいわ」

何がいいのかさっぱり分からない。会話の主導権を少女に握られたまま、マシユウは口を挟むタイミングを掴み損ねている。

「じゃあ一つ頼もうかしら。私を港町のアトレスというところまで

連れて行きなさい」

頼み、と言うよりも命令口調だ。

勝手にてきぱきと話を進める少女に、マシユウは暫し啞然とし、口を開き、また閉じて、間を置き。それからやつのことで答えを返す。

「断るッ！ て言うか、何でそうなるんだ？ あんた……勝手に人の馬車に乗り込んで、勝手に人を品定めして、勝手に行き先を指定して！ しかも、自分のことは一切話さないときたもんだ」

一気にそうまくしたてるが、言われた本人はしれっとしている。

「小うるさい男はモテないわよ？」

あまつさえ、そう切りかえされてしまった。

その理不尽な態度に、もう一度口を開きかけ、息を吸って。何を言っべきか一瞬迷い、がつくりとそのまま頭を垂れた。

「いやはや！」

本音を言えば、このような場所で押し問答をしているような気分ではない。一刻も早く次の街に到着し、仕入れたばかりの品をしかる値で売却したいところだ。なぜならその品は、鮮度を保つ期間に限られている物だったから。

「レジーナよ」

額に指を立てたマシユウに、出し抜けに少女が言った。言葉を投げつけるように、いかにも面倒だと言わんばかりの口調で。

「私の名前、レジーナよ。これでいい？ でもここにいる理由は教えられない。さあ、もういいでしょう？ 早くしないと日が暮れちゃうわ。馬車の荷台で一夜明かすなんて死んでもごめんだわ」

「……このわがまま女ッ！」

マシユウの更なる本音としては、このままここに放り出して行きたいというものだった。

しかし。

今いる場所はそれなりに整えられた道ではあるが、周りは薄暗い森。仮にここで追い出したとして、一番近くの、朝に発った町まで歩いたとしても、今日中に着くことは確実に不可能だろう。

そうになると、この軽装の少女は、夜気に凍えるかもしれない。それだけならまだしも、下手したら狼などの餌食になりかねない。さすがにそれは見殺すようで気が引ける。

今度は、マシユウがレジーナと名乗った少女をしげしげと眺めた。淡い栗色のふわふわした髪を、小さな宝石の嵌められた髪飾りでまとめている。身に纏っているのも、裾の長い美しい絹の服だ。細い足の靴も踵が高く、町中を駆け回るのに向いていないのは明らかで。つまりは、おそらく彼女は良い身分の娘だということだ。

「分かった……。アトレスは次の街だ。そこまで乗せていこう。ただし。義理も無いのにタダで乗せてやってるんだから、わがままは言わないこと！」

マシユウの苦渋の決断に、レジーナは礼を言うこともなく、ただ肩をすくめただけだった。

「恩着せがましい男もモテないわよ？」

それにマシユウが青筋を立てたのは言うまでも無い。

港街に辿り着いたのは、翌日だった。

結局、一晩は野営となった。マシユウが火の番をし、レジーナは荷台で野営用の毛布に包まって眠った。意外なことに、文句は言わなかった。彼女なりに、マシユウに言われた条件を守ろうとしているのだろうか。口は悪いが、根はさほどではないのかもしれない。

街に入り、港近くの交易所付近で馬車を停める。隣りで物珍しうに辺りを眺めていたレジーナが、そこで弾かれたように息を呑み、マシユウを振り返った。

「ここでいいか？」

「……ええ、いいわ。ありがとう」

その言葉をレジーナの口から聞けるとは思っていなかったマシユウは驚いた。しかし、顔には出さないでただ頷いた。

「これ」

馬車を降りてマシユウを見上げ、レジーナは軽く握った拳を差し出した。何かと手を出すと、そこに数枚の硬貨を落とされた感触がした。

「ここまでの代金よ。少ないかもしれないけど。じゃあね」

早口に言って、踵を返し、その後ろ姿はあっという間に人込みに紛れてしまった。

「結局、そんなにひねくれた娘じゃなかったのかもなあ」

誰ともなしに一人呟き、手の中のそれに目をやり。言葉を失う。それはあまりにも多過ぎる額の金貨だったのだ。これだけあれば、高級な宿にたつぷり一週間は部屋を取れるだろう。そこでマシユウはふと気になった。

もしかしてレジーナは、金銭感覚に相当うといのではないか、と下手したら屋台の軽食の支払いにすら、堂々と金貨を出すかもしれない。そしてこの街は大きい。それだけに様々な人間が集っている。そんな中でそのような目立つ行動をしたらどうなるか。おおよそ想像したくないことになる……気がする。

半ば無意識に、慌ててその姿を捜していた。街で一番賑わう大通り、押し寄せる人波の中を必死に目を凝らす。注意して手綱を操らなければ、馬が人に驚きそうなほどの賑わいだ。すると。

「お嬢さん、これは困るよ、お釣りがないんだ」

「だから、お釣りはいりませんってば！」

「と言つても、そういうわけにもなあ……」

「ウチの連れが失礼しましたーッ！」

最後のセリフは、マシユウのものだ。案の定だった。旨そうなパンを前に金貨を差し出すレジーナに、困り果てている店主。その間に身を滑り込ませて、代わりの、パンと価値の等しい銅貨を一枚手渡す。

それからパンを掴み、目を丸くしているレジーナを強引に馬車に押し上げて、その場を後にした。行き先は決めていなかったが、とりあえずは人の多いこの通りから離れようと馬を急がせる。

「どうして？」

開口一番。少女は本気でわけがわからないという表情だ。

「レジーナ、金貨つてのはすごい価値のある硬貨なんだ。そんなパ
ン一つ買うのに使うようなものじゃない。その辺の石ころと宝石を
交換しようって言うてるのと同じだ」

「そうじゃなくて。なんであなたが追ってきたのかってこと。まさ
か、私に惚れたの？」

「いやあ、ないない」

頭の中で、絶対に、と加える。

「そんなはつきり否定するなんて酷いわね！　少しは悩んだってい
いじゃないの」

頬を膨らませ拗ねた様子で、胸に引き寄せた膝に顎を埋める少女
は、その大人びた外見とは逆に幼く見えた。

思わずマシユウは口元を緩める。馴れてくると、レジーナの言動
が楽しくすら感じる。

「なあ、あんた実はけっこういい身分のお嬢様なんだろう？」

「どうしてそう思うの？」

「誰でもそう思うって。その服装にたくさんの金貨。加えて、世間
を知らないところを見ればね」

「失礼ね！　……って言いたいところだけど、今回ばかりは反論はで
きないわ。ええそうよ、私は世間知らずの馬鹿な貴族の娘よ」

「ただ知らないのと馬鹿は違う。自分をそう卑下するもんじゃない」

前を向いたままさりとってやると、レジーナは一瞬、呆氣に取られた表情になった。両膝を抱えていた腕の力が緩む。

「……マシユウって歳、いくつ？」

「？ 17だけど」

「私より一つ下じゃない。その割には、言うことが上から目線よね。なんかこう、落ち着き過ぎてるっていうか」

「悪かったな、年寄りくさくて」

「落ち着いてるのと年寄りは違うわよ。自分をそう卑下しないでよ」

しおらしくしていたのも一瞬だった。気を抜くと、次の瞬間にはうまいこと返されて、返答に窮してしまう。

昨日は彼女の達者な物言いに随分と狼狽させられたが、今は、自然と笑みがこぼれた。マシユウが思わず口元を緩めると、レジーナもつられて軽く吹き出した。途端に馬車に二人の笑い声が弾ける。

「マシユウって変わってるわ。私が貴族だって知ったら、みんな態度がよそよしくなっちゃうの。でも、あなたは違うわね」

「俺の出身地の領主が気さくな人でね。誰にでも気軽に声掛けるわ、一緒になって農作業に精出すわって、そんな感じだったもんだから。だから、身分がどうのこうのって壁を作る感覚があまりないのかも。しれないなあ。でもレジーナ、どうしてこの街に？」

「それは……」

そこでレジーナは口ごもって俯いた。揃えて置いた手をもみ絞り、横目でちらりとマシユウを見て。だいぶ迷った様子だったが、思い切ったらしい。

「人に会いに来たの」

彼女はぼつりと呟いた。

「その人はかけだしの商人で、三年前にここから船出したのよ。一財産作って、私の相手として認められるようになって帰って来るって」

例え身分が貴族よりも低いとされる商人でも、それなりに認められるほどにまで登りつめれば、貴族の娘の伴侶として迎えられ、こともあるにはあった。もっともそれは非常に稀なことではあったが、マシユウは頷いて、続きを待つ。

「三年後の同じ日に、この街の広場で再会の約束をしたの」

「それはいつなんだ？」

「明日よ。間に合って良かったわ」

そう微笑んだレジーナの頬は、嬉しさにかすかに上気している。

「そうか。……って、でもどうして一人で？」

「実は、彼とのことを父はよく思っていないの。私もそろそろ結婚しても問題ない年齢だし、最近じゃよく色んな人を薦められるわ。でも私はそんなの嫌。だから一人で家を飛び出して。でも家の者に追われて、慌てて隠れた馬車がこれだったの」

なぜレジーナが自分の馬車に乗っていたかが判明し、マシユウは溜息をついた。納得はあった。だが、どうも引っ掛かる。

「レジーナ、その相手に何か渡したりしたのか？ 例えば、金、とか」

「ええ、もちろんよ、金貨三百枚渡したわ。でも、ちゃんと返してくれるって。それがどうかした？」

「うわ！」

そこで勢いよく頭を抱え込んだマッシュウを、レジーナは目を丸くして見つめる。

「レジーナ、あんたはその男に金を貸した、と。それで、借用証書は？　ちゃんと受け取ったのか？」

「しゃくようしよしよって何？」

初めて聞いた言葉を、ゆっくりと反芻する。その様子に、明日その男が現れない方に全財産を賭けてもいい、とマッシュウは胸中で唸ったのだった。

後編

人が集い、憩う広場。

そこでレジーナは、蒼白な表情でひたすら待ち続けている。もう三日だった。行動を共にする約束をしたというわけではなかったが、マシユウは彼女を放っておけなかった。行商人である自分にはすべき仕事もあり、ずっと傍に付き添ってはられない。

それでも時間を見つけては広場に顔を出し、時には簡単な食事を持って行きさえもした。

そんな差し入れを手に、受け取った時のままの体勢で、レジーナは唐突に口を開いた。

「滑稽だっと思っていらっしゃるでしょう。来るはずのない相手を待つなんて」

「そんなことはないけど……」

「けど？」

「そろそろ家に帰ったほうがいいんじゃないか、とは思ってる」

「それで親の決めた相手と結婚しろと？」

「そこまでは言っていない」

暫し、重い沈黙が流れる。再び先に口を開いたのは、レジーナだった。

「私、今度こそ馬鹿だっって言われるかもしれないけど。彼のこと信じてるの、今でも」

どうして、と言いかけて、マシユウは言葉を呑み込んだ。

どうして――

そんなことは分かりきっている、レジーナがその男を心底想っているからに他ならない。そしてその理由なんて説明できるものでもないだろう。人を好きになるということは、理屈ではないのだから

「来ないのには何か理由があるんだって、そういう気がしてならないの。だからもう少し待つわ。せめてあと二日だけ」

「止めはしないさ。けど、暗くなったらすぐ宿屋に帰るんだ。いいな？」

マッシュウの忠告にレジーナはこの日初めて笑顔を見せた。それって年上に言うセリフじゃないわ、と。

夜もだいぶ遅くなってから、レジーナは宿に戻って来た。部屋への階段で、マッシュウは彼女と会った。いつもは軽い口調で何か一言残す彼女が、その日は違った。上目遣いで軽くマッシュウを一瞥し、すぐに部屋へと籠ってしまふ。その様子に少し心配になったマッシュウは、彼女の部屋の扉を叩いた。名乗ると、小さな声で「どうぞ」と返事があつた。

部屋を見渡すと、小さな明りがテーブルの上に乗っている。レジーナはそのテーブル脇の椅子に座り、頬杖をついていた。マッシュウが入っても、瞳は揺れる明りに向けられたままだ。

「あの、大丈夫か？」

「何が？」

気遣った言葉への返事も投げやりだ。

「何って、見るからに元気がないじゃないか」

「……そうね。そうかもしれないわ」

「こういう時ってなんて言っていいたかわからないけど」

「私だってなんて言ってもらいたいかわからないわ。大丈夫、きつと帰って来る？　それが一番安心かしら？　でもそんなの、気休めにしかないもの」

一気に言い放ち、そこでやつとでマシユウの方を向く。その目は微かに濡れているように見えるが、淡い光のせいだろうか。

「……ごめんなさい。八つ当たりだわ」

「いや、いいよ」

苛つく気持ちも分からないでもない。

「でもね、昼間言ったことは本当なの。私は彼を信じてる。彼は、裏切るような人ではないわ、それも本当よ。ただ心配なの。約束を破ったことがない人なのに」

レジーナがその男のことを本当に信頼し、想っているということ、今の状況では一番辛く思えた。

少しでも疑うことができるなら、どんなにか楽だろう。

そこでマシユウは一度は躊躇いながらも、思い切って口を開いた。彼女のことを思うからこそ、自分が客観的に見て感じたことを言うてみよう、と。

「けど、もし本当に帰って来なかったら？　それも意図して。世の中にはそういう奴だっていくらでもいる。そういう人間に限って、表向きは人畜無害な人の良さそうな奴だったりもするもんだ」

さつとレジーナの顔が青くなった。唇をぎゅっと引き結ぶ。

「彼は違うわ！ それならマシユウはどうなの？ あなただって、人畜無害で人が良さそうに見えるわ」

「俺はそんなことはしないって！」

「彼だってそうよ！ 彼のことをよく知らないのに、決め付けないで！」

そのまま彼女はベッドに身を伏せた。肩を震わせている。まさか泣かせてしまったのか。慌てて宥めようと必死になる。

「あ、ごめん、そんなつもりじゃなかった」

早歩きで彼女の傍へ行き、さんざん悩んだ末に、その細い肩に手を伸ばす。

すると。

「引っ掛かった！」

がば、と顔を上げたレジーナの目は、悪戯っぽく笑っていた。マシユウは思わずその場で固まってしまふ。伸ばした手もそのままですんなマシユウをよそに、ふいに真剣な面持ちになり、レジーナは姿勢を正してベッドに腰掛ける。

「でもお願い。もう二度と言わないで。そんなことはないって分か
つてても、辛いから」

有無を言わさぬ真剣な口調に、マシユウも神妙に頷く。

「分かった、もう言わない。その代わり、嘘泣きももう二度としないでくれよ」

そこまで言って、にっと笑って。

「辛いから」

そう付け足すと、レジーナは途端に大きな声で笑った。数日振りに聞く明るい笑い声だった。

言葉通り、彼女は二日を約束の場で過ごした。しかし、待ち人は現れなかった。この街まで連れて来た上に、数日を共にしたということもあり、レジーナを元の町まで送る責任があるように感じた。そう告げると、それに彼女は礼を言い、大人しく従った。

「ここを出る前に一度、港に寄ってくれる？ 彼が最後に去った場所を見たいの」

「ああ、もちろん構わないよ」

なるべく早くに送り届けてやりたいところではあるが、躍起になって急ぐ旅路でもない。快く承諾し、ゆっくりと馬車を港へと向ける。その間、レジーナは押し黙ったままだった。その表情は、マシユウが心配したほど落ち込んでいるようには見えなかった。それでも彼女の心境を推し量り、マシユウも黙っていた。

やがて視界が開け、たくさんの船が泊まる港に着いた。ちょうど先ほど大きな船が到着したらしい。そこは大きな荷物を抱えた人々で溢れかえっていた。

その慌しい様子をぼんやりと眺めて、レジーナは突如、身体を強

張らせた。その目は、船から下りてくるただ一人の人物を捉えている。

「ダーアルシー！」

マシュウの知らない名を叫び、馬車から半ば転がり落ちるように降りる。人の波を掻き分けて、華奢な靴で必死に地面を蹴る。

もう一度、名を呼ぶ。悲鳴に近い声で。

「レジーナ！」

呼ばれた青年も彼女に気付いた。港の固い石畳の地面を踏むと同時に、少女の身体を強く抱き止める。

「私、信じてた、信じてたわ！ きつと戻って来るって」

「遅れてすまなかった、心配かけたね」

溢れ出る涙を拭うこともせず、レジーナは青年を細い腕で抱きしめ続ける。離れたら、またどこかへ消えてしまうのではないかと恐れているのだろうか。

「本当は、約束の日には間に合うはずだったんだ。けれど、荷物を船に載せて、いざ自分が乗り込もうとしたら、君から預かった指輪が見つからなくて。それを残していくわけには行かないと思って、探していたんだ」

「あんな物、またいくらでもあげたのに……そこまで大切にしてくれてたの？」

「レジーナ、僕はあの指輪に……いや、君に助けられたんだ。当初乗る予定だった船は、嵐に遭って沈んだらしい。もしあのまま乗っていたら、こうしてまた会えることもなかったんだ」

そう言つて、鎖で首に提げた細身のそれを見せた。その指輪は三年前、彼女が旅のお守りとして渡した物だった。安物だが、それに嵌めこまれた石に旅を安全なものにするという謂れがあり、少女の幼い頃の宝物だった。

そして船の難破は、よくあることまではいなくても、時には起こりうる惨事だった。だがしかし、もちろんそんな深刻な状況を考へて渡したのではない。ただ、それを見て、いつも自分を思い出して欲しいという純粹な想いからだつたのだが。

「そんな……そんなことつて」

思いがけない出来事に、言葉を詰まらせ、口元を両手で覆う。にわかには信じ難い話だが、現に、彼はこうしてここに立っている。彼女の前に。

「荷はだいぶ失つたけど、君が貸してくれた金貨は無事だ。それに実を言つと、一度も手を着けていない。旅立つ時、渡してくれた君の気持ちはすぐく有り難かつた。でも、自分の力で何とかしたかつたんだ」

それを聞いたレジーナは、もう一度、ダールシーをしっかりと抱きしめた。

それから、水を差しては悪いとその場を後にしようとしていたマシューを慌てて引き止める。

「待つて、どこへ行くの？」

「どこつて言われても……その、すみません、俺が間違つてました！」

特に決めていなかったのだから、答えようがない。代わりに、謝罪の言葉が口を突いて出る。それは、レジーナが騙されていると思っ
い込んでいたことに対してのものだ。

しかし、マシユウは間違っていた。世間知らずだったのは自分の
ほうだったのかもしれない、とまで思えてしまっから情けない。

「この人は？」

ダーアルシーと呼ばれた青年がレジーナに尋ねる。

「マシユウよ。ここまで私を連れて来てくれたり、今まで色々とお
世話になったの」

彼女の紹介に、ダーアルシーは微笑んでマシユウに右手を差し出
す。

「レジーナの面倒を見てくれてありがとう」

「いや、大したことはしてないって」

誠実そうな人物だ、とマシユウも素直に認めた。きっと彼なら、
努力によって恋人の両親の首を縦に振らせることができるだろう。
それから改めて、港に立つ二人に別れを告げる。待ちわびた彼に
会えたのだ、自分の助けはもう必要ない。

「また会えるわよね？」

さようなら、とは言わずに、レジーナは微笑んだ。

街中へ馬車を進める。一度、何とはなしに背後を振り返った。手

を携え、肩を寄せ合い歩く後ろ姿が見えた。慣れているはずの一人の日常が、少しだけ、寂しいような気がして苦笑した。いつか自分もあの二人のように、お互いに固く信じ合える相手が見つかるだろうか？

独りも気楽で悪くはない。

しかし、気心知れた相手が傍にいないのはもっと悪くはないだろう。

夢と希望と馬車いっぱいの荷物を抱えて、彼は今日も慣れた道を行く。

< E N D >

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5068m/>

約束の街

2010年10月9日20時13分発行